

# 『西南学院百年史』 編纂を振り返る

**出席者** G.W. パークレー（院長）

小林 洋一（百年史監修委員長、前百年史編纂委員長）

伊原 幹治（百年史編纂委員、百年史監修委員）

村上 隆太（百年史監修委員）

堤 啓次郎（百年史監修委員）

篠田 裕俊（事務局）

高松 千博（事務局）

**司会** 金丸 英子（百年史編纂委員長）



## ◇ 編纂過程の振り返り

**司会(金丸)：**今日は、百年史の編纂に関わった先生方にお集まりいただき、百年史編纂について全般的なことを振り返っていただきながら、ご意見やご感想、また次の年史編纂に参考になることがあれば、積極的にご発言いただきたいと思います。

**篠田：**では口火を切って私から発言させていただきます。まず編纂委員会や各部会、監修委員会のことですが、委員の皆さんには精力的に活動していただいて感謝したいと思います。ただ執筆者については、あまりに人数が多く、体裁や筆致を揃えるのに時間がかかったという印象があります。それと印刷業者との連携がもう一つだったように

思います。担当者の入れ替わりが激しく、どこまでお願いできるかを途中で再確認する必要がありました。



篠田 裕俊 氏

高松：業者選定では、3社でプレゼンを行い、見積りを取った結果で決めました。年史編集に特化したオリジナルのデータ管理ソフトの提案があったことが決め手だったと思います。

小林：最初に細かなところまで、分担を決めておけばよかったのかもしれないね。次の年史では、もう少し仕事の内容を詰めて分担を明確にしなければならぬと思います。

伊原：その分、印刷業者の負担が少なかったのではないのでしょうか。様々な仕事で、監修委員会に偏って負担が増えたように感じます。

司会：百年史は、学院全体で作るというコンセプトにより、延べ84人の執筆者をお願いしました。そういう意味では、完成した時に愛着がわくという利点はあると思いますが、執筆者が多いと問題もあったのではないのでしょうか。

高松：七十年史は、ほとんど担当の事務職員が執筆していますが、その反省もあって執筆者を増やしました。編集委員会の記録を見ると、総論の場合、当初、編集委員に加えて若干名と考えていましたが、歴史を経験された方がいればそういった人を書いていただいた

いということで徐々に増えていきました。

小林：今回の編纂は、七十年史の時にはなかった初めての体制で行われて、反省点がありますが、これはこれで一つの経験になるのではないかと思います。

伊原：次回ということを考えるなら、今回の編纂体制がベースになるでしょう。七十年史のような仕組みは難しいし、今回の反省がどう生かされるのかなと思います。

#### ◇ 執筆者と部会

堤：各部会ですが、執筆前の段階では、どういうテーマ・内容を誰にどういふふう書いてもらうか、を決めることが主な役割だったと思いますが、第一次原稿が出てきた段階では、各部会はどういう役割だったのですか。

高松：各部会では、まず編纂委員会で決めた総論と各論のすみわけに従って、目次構成と執筆者選定の案を決めてもらいました。原稿が提出されたら部会で一通り目を通して、全体の流れや各項目の分量のバランスなどを見ていただきました。それを監修委員会で精査するという体制を取りました。

堤：今後、各部会の役割を大きくすることを考えてもいいのではないのでしょうか。各部会は、原稿ができた段階で、計画した課題や構想がどのように実現しているかを検討・確認する、場合によっては加筆・修正する、いわば編集的な活動をもう少し強めてはどうでしょうか。各部会は、学院の活動の単位、現場そのものなのですから。学校史の作り方は学校によりそれぞれですが、西南学院ではどのような態勢が適当なのかを考える必要があります。今回のように、執筆者が多い上に、編

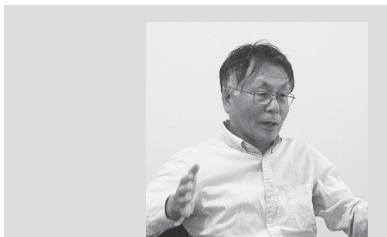
纂に関する全問題を編纂委員会なり監修委員会が担当するというシステムは、一見、集約的に見えるけれども、事実上、能力的にも時間的にも無理があると思います。

司会：百年史は、最初から部会の体制で進める予定だったのでしょうか。

高松：当初、総論と各論に分けて執筆することになっていたのですが、総論は編纂委員会で、各論は部会で動かしていこうということになったと思います。

司会：はじめは、プロのライターの方をお願いしようという案もありましたが、その案は取り上げられませんでした。その理由は、そうするとライターにお任せになってしまって、資料を提供していただいた方や編纂委員会とのコミュニケーションをうまくとれるかという懸念もありました。次回は、お互いの立ち位置も分かった上でコミュニケーションもよくとれるような仕組みをつくってから、ライターに委託するという選択肢もあるのではないかと思います。

伊原：次に書くとしたら150年史ということになると思いますが、またゼロからスタートするのか、百年史の後の50年を執筆するのか、今のうちにある程度、道筋を決めた方が良くと思います。その上でそのための資料の準備などをしてもいいのではないのでしょうか。



伊原 幹治 元中学校・高等学校校長

篠田：資料センターが設置されたのですから、紀要を年に1回発行し、それをまとめて10年に一度、百年史を補完する資料集みたいなのを作成する。そしてそれをベースに150年史を発行するというようにしてはどうでしょうか。

伊原：そういう仕組みがあれば、かなり助かると思います。実際、百年史には『西南学院史紀要』が非常に役立ったので、資料集みたいなのがあればいいですね。

小林：そういう意味で資料センターも設置されましたから、そこを中心に将来の年史を見通して企画していくことになるのではないかと思います。

司会：今回は、西南学院が開学したころの近代日本との関係からしっかり吟味したので、150年史は、原則として百年史以降の記述でいいかもしれません。

篠田：西南学院が、日本の近現代史とどうかかわっているのかという点は、七十年史ではあまり触れられていませんでした。しかし、伊原先生が執筆された各章の「時代背景」には、日本の近現代史が記載されており、西南学院の歴史とのかかわりがよく理解できました。これは西南学院百年史の特徴でもあり、私自身も勉強になりました。

#### ◇ 監修委員会と各学校のバランス

司会：では監修委員会についてはどうでしたか。ピークの時には週3回、10時から4時までしっかり監修作業をしていただきました。途中で誰か倒れるんじゃないかと心配したぐらいでしたからね。(笑い)

堤：小林委員長が納得しない個所は何か問題があるところであり、OKが出るまでみんなでしっかり議論を続けました。そういうところは信頼感がありました。



司会 金丸 英子 教授

司会：私も監修委員会のメンバーだったのですが、よかったのは、委員の皆さんが発言するところはきちんと発言されたということだと思います。内容的に敏感な部分の議論もあったと思いますが、その議論を通して信頼関係が生まれ、一緒に仕事ができたので非常によかったと思います。

小林：監修委員会に期待されていたのは、大所高所からの意見を聞きたいということであって、些細な文字の校正などは必要ないということでしたが、実際は後者の方が多くて、読み合わせをしながら修正していきました。それにはすごく時間がかかって、2年近く発行が遅れたのはやむを得ないことだったと思います。次回は、これくらいのスパンが必要だということではないでしょうか。

司会：監修委員を選ぶとき、専門性を発揮できるメンバーを考えた上で選んだのですが、実際の仕事は、「てにをは」レベルの修正が多かったように思います。ですから次回は、文字の修正と専門的な監修を分けて行ったらいいのではないかと思います。

小林：たまたまですが、我々監修委員5人のうち、一人がキリスト者ではなかったことが、本当にありがたかったと思います。というのも、キリスト者

の間では、当たり前のように使っている単語や表記方法は、キリスト者ではない人には説明が必要だったということです。こういう編纂委員会や監修委員会では、キリスト者ではない方も加えることが大切だと教訓として感じました。それと現役の教員にとって、年史の編纂は負担が大きすぎるということです。この体制で行くなら、編纂作業の主になる人は、時間の融通が利く退職した方をお願いするべきだと思います。

堤：現職ではない方が、少し距離を置いて見るができるという意味もあるのではないのでしょうか。渦中にある人ではなく、リタイアした人が客観的に見るということも大切ではないかと思えます。

伊原：リタイアということで少し関連があるのですが、百年史を書くということは、退職した我々にとって「自分史」を書くような感覚があったと思います。長年、自分が働いた職場は、こういう歴史を歩んできたのかということが改めて分かりました。

高松：これは、事務局の責任だとも思いますが、資料を揃えて、年表などもきっちり作成した上で、原稿を依頼したらそういうことにはならなかったのだろうと思います。編纂作業が始まっているのに、米国南部バプテスト歴史古文書館や国立公文書館に資料の調査に行っていたりなど、資料収集が同時進行で動いていました。次の年史のことを考えると、今のうちから資料の収集を行わなければならないと痛感しました。

村上：今回、各学校をバランスよく取り上げたつもりですが、やはり鳥飼校地の舞鶴幼稚園や早緑子供の園の記述が少ないような気がします。その時その



村上 隆太 名誉教授

時の、鳥飼校地の雰囲気やその人たちが何を感じながら生きてきたのかということが、あまり伝わってこず、百年史に反映されなかったのではないのでしょうか。百年史や西南学院のことをどのように見ていたのか。そこをいつも考えながら、編纂にあたっていました。

小林：パークレー先生は、早緑子供の園の園長として鳥飼校地によく行かれると思いますが、そのような時に西南から精神的に距離があると思われたことはありますか。

パークレー：距離があるという感覚はなく、やはり西南学院の一部であると思います。鳥飼校地の教員には、一人もキリスト者がいないにもかかわらず、非常に協力的です。先日、記念式典をしたのですが、きちんと礼拝から始まっていました。



G.W. パークレー 院長

高松：長く幼稚園の主任教諭をしていた先生に原稿を依頼したのですが、七十年史では、舞鶴幼稚園と早緑子供の園は「その他の教育機関」という扱いになっていたから、百年史ではそういうことがないようにしてほしいと釘を刺されました。(笑い)

村上：やはり鳥飼校地の舞鶴と早緑は、西新校地に比べて外に置かれているという感覚があるのでしょうか。そういう危惧を持っているからこそ、両園とも西南学院の一部であると証明していかなくはいけないと思います。学院史の立場からもそのことを忘れてはいけないのではないのでしょうか。

パークレー：学院から軽んじられているとは感じてはいないと思いますが、現場の声が学院にどこまで届いているかということを感じます。

小林：百年史では、理事会、事務局、同窓会、それぞれを取り込み、学院を構成するものと示せたのはよかったと思います。そういう意味で、七十年史では、それぞれの位置付けが明確ではなかったような気がします。

#### ◇ 自校史教育と建学の精神

司会：いろいろご意見が出ていますが、事前に準備していただいた内容で、まだ触れていない項目がありましたらお願いします。事務局の体制はどうだったのでしょうか。

小林：事務局のスタッフががいなければ、この時期に百年史は完成していなかったと思います。本当によくやってくれましたが、もう少し人数を増やした方がよかったのではないのでしょうか。

篠田：資料センターがどういう方向へ行くのかで、次の年史の事務局の体制も決まっていくのではないのでしょうか。



今後は、アーキビストや自校史専門の教員が不在では難しいのではないかと思います。

村上：一方、旧教職員で、しかも学院の運営などに携わった方々、いわゆる歴史の証人に話を聞く機会を数多く設けるのも必要だと思います。

司会：つまり、オーラルヒストリーが重要になるということですね。インタビューを行って記録にまとめるという作業は大事だと思いますので、もしアーキビストがいれば、その人が計画していくことになるでしょうし、今後の資料センターの事務体制の中で考えておかなければならないでしょう。それと、定年退職したのでパプテスト関係の資料を寄贈したいと言ってくる先生がいるのですが、そういうことも、もっとうまくアピールしながら資料を整える専門の方がいてくださると仕事が広がっていくのではないかと思います。

堤：西南学院では、文書管理はどうなっているのですか。

パークレー：文書保存規程があり、それには永久保存から1年保存までの期間が決められています。

篠田：規程では各部署で保存するので、資料センターでは、どのような資料があるか分かりません。そのため、この資料はあの部署に保管しているはずだと思っても調査する時間が取れませんでした。今後は、国立大学のように一定期間が過ぎたら、すべて資料センターに移管するような仕組みを作らないと歴史資料として残っていかないとします。

高松：資料を廃棄する時は、資料センターにご連絡くださいという案内はしていますので、今後は、集まってくるのではないのでしょうか。

司会：百年史刊行の意義の中の一つでもある自校史教育についてはいかがでしょうか。

堤：西南学院は人を育てる組織ですから、学院がどういう道をたどって来て、現在どうあるのか、どの方向に進むのか、常に内省というか自己点検を行う必要があると思います。教育機関として、常に自分自身に問いかけながら、意識を研ぎ澄ませておかなければならないと思います。そのために、学院史の編纂は重要な活動であり、また自校史教育が大きな役割を果たす、と今回の編纂過程で思いました。さらに言えば、学院史の作成は、社会への説明責任を果たす行為でもあります。



小林 洋一 名誉教授

小林：将来のことを言うと自校史教育は、「西南学院学」というものに発展させる方がよいのではないかと思います。それは、ある意味わかりにくい建学の精神を実際に目指して、どういう教育や研究が行われて実を結びつつあるのか、それをきちんと実証・検証して、西南学院の将来のあり方を目指すような、西南学院学というものを打ち立てていくことが大切だと思います。将来的には大学院の修士論文や博士論文を執筆したり発表したりするようなことを積み重ねていったり、教育と研究、あるいは科学と宗教、平和など建学の

精神を基盤として、どういうふうに発展して実を結んでいくか、ということをもとめていくような、いわゆる「学」を将来、発展的に確立していけばいいと思っています。

**司会：**百年史を発刊した意義ということと結びつければ、いろんなテーマだとか関心、意識付けが成果としてあったのではないかと思います。百年史を作っていく中にも、たとえば紀要や学院史講演会など、いろいろな研究の成果を取り入れて行って発展しました。



**堤：**百年史はこの形でよかったのかの総括をいろいろな面からきちんと言う必要がありますが、七十年史との違いは意識してもよいと思います。百年史は、時代や社会と学院との関係を意識しました。例えば、「戦争と学院」では、執筆者と事務局の努力によって、学院の時勢への対応、学徒出陣、戦没者慰霊祭の実施など、従来必ずしも十分に検証してこなかった問題を記すことが出来ました。また、学院が「平和宣言」を発した経過、想いと決意を記しました。これらは、学院のあり方を常に考えることや、現代の平和の問題に繋がっていくと思います。自校史を学ぶ際の要点の一つだろうと思います。あるところで「平和宣言」を紹介したことがあります、ある女性の方から、

中学校ではどう受け止められているか、生徒たちはどういう議論をしているか、という質問が出ました。残念ですが、私は答えることが出来ませんでした。

「平和宣言」は、社会的に評判となり、高い評価を受けましたが、学内ではどうだったのでしょうか。私たちは、自分たちの歴史からもっと学ぶことができるように思います。

**司会：**今、先生方がお話しくださったことを、どうやって研究会に発展させていけるかということがあります。研究会を開きたい、研究会は大切だという認識はあるのですが、どうも簡単にはいかないようです。

**篠田：**研究会を立ち上げて、それをリードする人がいないと続かないのではないかと思います。仮に事務局が世話役で加わったとしても人手が足りず、今後の資料センターの体制が問題になるのではないのでしょうか。

**司会：**個人的には、アーキビストがその役割を担ってもらえればと考えています。

**小林：**研究会と言えば、はじめの頃に何回か開きましたよね。あれはどうなったのでしょうか。

**高松：**2013年から2015年まで9回開催しましたが、徐々に百年史の編纂に追われて、余裕がなく開催しなくなったというのが正直なところです。明るい材料としては、自校史教育の見直しのプロジェクトチームが動き出しましたし、その中で、アーキビストの採用ということも検討課題に入っています。それと百年史ができたことで自校史教育の幹となるものができたというふうに、そこでは捉えられていました。

**司会：**私もプロジェクトチームのメンバーなのですが、百年史が刊行されたということは、好意的に受け止められていてよかったと思っています。

## ◇ DVD版という新しい媒体

篠田：百年史には、時間がなくて索引を付けられませんでした。その代わりDVD版を作製しました。その評価はどうだったのでしょうか。また、機会があれば百年史の「索引篇」を発行してはどうかと思います。

堤：やはり、年史というのは、更新可能な電子媒体ではなく、固定的な紙媒体でつくることが原則ではないでしょうか。特に索引は、学院が複数の教育組織から成り立ち、それぞれが固有の経緯や事情を持っていることを考えれば、読者の利便のためには付けるべきだったと思います。目次は、かなり詳細にしましたが。

小林：私もDVD版で検索しましたが、あれは便利ですね。それとDVD版の付録でカレッジソングや100周年の祝賀会で披露した映像などもあって、とてもよかったと思います。

司会：学生が百年史を購入したいということで、製本版とDVD版があると説明したら、DVD版の方を選びました。若い人たちは画面で見の方が慣れているのでしょうか。

高松：今回は、DVDという新しい媒体が出てきましたが、次の年史ではまた違った媒体が出てくるのではないのでしょうか。

篠田：今まで七十年史の統計を基に基礎資料を集めていましたが、それを継続して3年から5年に一度ぐらいは公表してもいいのではないかと思います。それに年表を付けて、資料集として出せば、それが次の年史に役立つのではないのでしょうか。

伊原：特に物資料の保存についての意識を高める必要があるでしょうね。例えば、国旗掲揚台や元寇防塁の石碑など

いつの間にか処分されていました。資料センターが開設されてからは、そういったことも減っては来ているでしょうが、そういう意識を持ってほしいですね。

村上：学院内には、まだ眠っている資料があるのではないのでしょうか。そういった資料を集めるのは資料センターの役割だと思いますが、そこに歴史資料があるといったことを知らせなければ捨てられてしまうので、学院史に対する意識を喚起することが大切だと思います。

高松：最近では、学院内でもアーカイブに対する意識が高まりつつあって、資料を処分する時は資料センターに確認するということが随分徹底されてきました。また、施設の方も本館や図書館が取り壊されるときは、実際に見に行っただけで保存すべき物を確認したりしています。しかしそれもここ10年といったところでしょうか。

篠田：また、卒業生も古い資料をお持ちなので、ホームカミングデーなどで呼びかけて、寄贈してもらえるようになっています。

小林：パークレー先生が、同窓会などに行かれるときは、寄付金もそうですが、物の寄付も受け付けていますと言ったら申し出があるんじゃないのでしょうか。(笑)

## ◇ オーラルヒストリーの危険性と今後の課題

高松：先ほど、オーラルヒストリーの重要性が話題になりましたが、逆に人の記憶の危うさという問題もあるのではないのでしょうか。例えば、水町先生が、校歌は中学部の第1回の卒業式で披露されたということを約30年後に思い出



話で語っていますが、それを裏付ける一次資料が今のところありません。プログラムにも「校歌斉唱」という文字はありません。第2回の卒業式プログラムには正式に記載されています。ですから百年史は、「1921年、この年西南学院校歌誕生、ただし、卒業式のプログラム等には記載なし」という表現にし、断定はしませんでした。ほかにも「日曜日問題」の野球の試合などもそうですが、記憶が間違っているかもしれないから、オーラルヒストリーは気をつけないといけませんね。



伊原：オーラルヒストリーではないのですが、私は「グラウンドマーチ」の間違いがおもしろかったですね。

小林：我々監修委員は運動場で行うので、「グラウンドマーチ」と思っていたところ、最終校正の段階で、「グラウンド」の表記はどうするのかと疑問が出され、英語辞書を調べたら、そのような単語はないことが分かりました。結局、「グラウンドマーチ」（全員による大行進）であることが分かったのですが、あやうく過ちを見過ごすところでした。

司会：そういうことが、集まって行う仕事の醍醐味じゃないでしょうか。

小林：我々百年史に関わった者の振り返りや感想は聞きましたが、第3者が百年史を読んで、どう評価するのが聞

こえてこないんですね。1冊全部は無理だから、大学、中・高など部門ごとに評価や感想を出してもらいたいと思います。そしてそれを研究会のテーマとして追求し、研究成果を紀要に載せるというようにつながっていくと思います。

伊原：それと関連して、百年史の出版記念会のような計画はないのでしょうか。執筆者に公的に感謝を伝える機会があってしかるべきだと思います。また、その時に七十年史との違いを示すとか、先ほどの校歌の話などちょっとしたエピソードを盛り込むと興味がわき、読む人が増えるんじゃないでしょうか。

小林：単なる出版のお祝いではなくて、百年史の評価や感想などをシンポジウムのような形式で発表して、その後、懇親会をするような形が望ましいですね。

司会：出版してあまり時間が経つとタイミングを逃しますから、早々に実現すればいいですね。

平和宣言作成に関わった者として、非常にいい冊子ができましたが、ではそれをどう生かすかという点で立ち止まっていて、それが気になっています。

堤：先ほど、監修委員の中にキリスト者でない人が一人いて助かったという話がありましたが、私のことですが、役割を果たせたかどうか…。百年史編纂事業の総括とは直接関係のない発言になりますが、一言。私は、この編纂過程で多くのことを学びました。しかし率直に言って、私のようなキリスト者でない者の立場からすると、「建学の精神」-「キリストに忠実なれ」を理解することは難しいです。現在の学院内のほとんどの人はキリスト者ではありませんが、どうなのでしょう。学院は、学院を構成する全構成員の学院で

もあります。「建学の精神」を日常の学院運営にどう具体化するか、我々の生き方としてはどうするのか。「我々の学院」ということを実現していくにはどうしたらいいか。もっと議論され、検討されるべきではないでしょうか。

**小林**：編纂の基本方針に「第一義的読者対象者を在校生、同窓生、保護者および教職員とする」と定めました。読者対象者として在校生を、どれほど意識化していたか、正直なところあまり自信がありません。以前、編纂委員会では他大学の年史を参考に取り寄せてみたのですが、ある女子大学は写真を中心にまとめ、カラーで読みやすい年史でしたが、我々の場合は少し硬めの年史でオーソドックスな内容です。編纂諮問委員長の塩野先生は、もっと学生や生徒の声や彼らの生き生きとした活動などが伝わる内容にしてほしいと

おっしゃっていました。それを忘れてはいませんが、あまり成功したとは言えません。今後の課題だと思います。今回の百年史は、正史ということで、西南学院のことが知りたければどうぞ百年史を読んでくださいと新任教職員には言っても、新入生の学生や生徒に対しては、その分厚さからそうもいかないでしょう。しかし、たとえそうであったとしても、学生・生徒にも手にとってもらい、自校への愛着心を培って欲しいですね。

**司会**：百年史やその編纂過程など、多岐にわたってお話いただきましたが、百年史の振り返りにふさわしい内容だったと思います。皆さんからいただいた貴重なご意見が、次の年史に反映されることを切に望みます。本日は、ご参加いただき、ありがとうございました。

※この座談会は、2019年6月21日、西南学院百年館2階会議室で開催しました。